



主のご降誕

おめでとうございます

Merry Christmas

& A Happy New Year!

つどい

644号

2025/12/24

〒204-0022 清瀬市松山一丁目二
カトリック清瀬教会
Tel. 042-(491)-0104

主のご降誕のお祝いと、新年明けましておめでとうございます。私たちは聖年の恵みの時を経て、新しい出会い

新たな出会いのはじまり

主任司祭 パウロ 野口 邦大

の恵みをいただきました。主が私たちのもとに來られる出来事は、希望と喜びの証であり、この光を多くの人に伝えていくことがキリスト者としての使命となっております。

日本では、出生数が過去最低を更新し、少子化が加速し、未来への希望が見えづらく、

喜びが実感しづらいものとなつています。また人々のつながりにも陰りが見え、個人主義の台頭や無縁社会と呼ばれる現象、さらには世界情勢が不安定の中にあつて、私たちがどのように過ごすしていくべきかが、わからなくな

つています。

ある意味八方塞がりな状況にあつても、それでも、救いに希望を見出すことができるのは、主が歴史に介入し、私たちの中に來られ、共に歩んでくださっているからであり、さらには私たちに死からの解放の恵みを与えて下さり、私たちは恐れることな

く、いつも喜びに満たされるためだからです。私たちにとつて唯一平等なのは命であり、「たとえ全世界を手に入れたとしても、自分の命を失ったら、何の得があるうか」(マタイ16:26)と言われている通り、たとえこの世で誰よりも豊かだったとしても、それらは私たちを救ってはくれません。

この世の命を失うことを恐れるよりも、「体は殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな。むしろ魂も体も地獄で滅ぼすことのできる方を恐れなさい」(マタイ10:28)とあるように、主との交わりを失うことの方が、よっぽど恐ろしいものとなつています。人々が愛を忘れ、自分さえ良ければという考えに陥った時こそ、希望は

失われ、絶望が訪れるのです。命は、交わりにより生まれ育まれるものであり、自分の命を守る事のみを優先させてしまうと、交わりが失われ、そこに不安や後悔、さらには絶望などの孤独に苛まれ、神様との関係性が希薄になってしまいます。

子供が、素直な自分を見せるように、私たちも自分を受け入れ、心を開くことで、他者を受け入れ、交わるものとなります。私たちが神様との関係を築く中で、欺くことのない自分を出し、主が共にいてくださることに感謝して過ごしていきましょう。

クリスマスのメッセージ 協力司祭

ドウカヤグ・アージー

愛する兄弟姉妹の皆さん。

二千年以上前、私たちは最初のクリスマスを迎えました。場所も時代も状況も、今とは大きく違っていました。しかし、大切な意味は今も変わりません。それは、キリストが私たちのために来てくださったということです。神の御言葉が人となり、私たちの間に住んでくださいました。旧約で約束されたメシアが実現し、まさに「インマヌエル―神は我々と共におられる」ということが示されました。フィリピンで育った私にとって、クリスマスには特別な思いがあります。世界中が同じ日にクリスマスを祝いますが、フィリピンのクリスマスは、霧囲気、人々の温かさ、家族の喜びは特別なもので

す。だからこそ、日本にいる今、その霧囲気や温かいクリスマス精神が恋しくなります。

しかし、どこにいても、クリスマスは「家族の祝い」であることに変わりはありません。最初のクリスマスは、聖家族―イエス、マリア、ヨセフから始まりました。そしてそれは、地上の家族だけでなく、「神の家族」を祝う時でもあります。救い主であり兄であるキリストによって、私たちは神の子として迎えられました。

最初のクリスマスの情景は、とても美しいものです。ヨセフとマリア、貧しい羊飼、神を賛美する天使たち、王である幼子に礼拝を捧げた東方の三博士。そこには、

天と地の家族がひとつになる姿が表されています。クリスマスが近づくこの時、皆さんのために心から祈ります。ご家庭や共同体だけでなく、何よりも私たち一人ひとりの心を、主を迎える準備へと向けていきましょう。私たちの心にキリストの居場所を作りましょう。そうすれば、キリストは家族や教会だけでなく、皆さん一人ひとりの心の内に住んでくださいます。

今年の大聖年のテーマは「希望の巡礼者」です。ですから、共に希望を持って、喜びの心で主のご降誕を待ち望みましょう。救い主をお迎えできるよう、最善を尽くして準備していきましょう。このクリスマス、キリストの光

が皆さんの上に豊かに注がれますように。喜びに満ちた、祝福あふれるクリスマスをお過ごしください。



自己紹介

私はアルジー・ドンガヤオ・ドウカヤグ神父 (Fr. Arjie Donggayao Ducayag) で、神言会 (SVD) に所属しています。一九九四年九月一日に、フィリピン北部、アブラ州ボリネイで生まれました。

二〇一三年に神学院に入る前、私はマナボ・アブラにある「Our Lady of Lourdes 教

会」でコンベントボーイとして働きながら学んでいました。この学校は「ホーリー・スピリット修道会」(ブルーシスター) が運営していました。高校卒業後、私は神学院に入り、四年間哲学を学び、二〇一六年に卒業しました。その後、タガイタイで一年間の志願期(ポストラント)、ミンドロ・カラパンで一年間の修練期(ノビシアテ)を行いました。

二〇一七年には、神学院の「Divine Word School of Theology」で神学の勉強を始めました。学士課程を修了した後、二〇一九年に海外研修のため日本に来ました。名古屋の南山大学で2年間日本語を学びました。その後、一年間秋田で司牧実習を行い

ました。しかし、ちょうどパндеミックの時期であったため、学校や教会での活動はとても大変でした。

日本での研修を終えた後、私はフィリピンに戻り、司祭叙階に必要な残りの課程を二年間かけて修了しました。そして二〇二四年二月十日、四人のクラスメートとともに、タガイタイの Divine Word Seminary で司祭に叙階されました。その後、初ミサや感謝ミサのために各地を回り、五か月を過ごしました。

昨年十月、再び日本に戻り、南山大学で一学期間日本語を勉強しました。その後、秋津教会と清瀬教会の協力司祭として配属されました。二〇二五年九月十二日に秋津教会と清瀬教会に着任しま

した。

教会学校キャンプ

教会学校では、九月二〇(二)日の日程で清瀬教会にてキャンプを行いました。宿泊を伴うイベントは久しぶりのことで、リーダーたちも試行錯誤を重ねました。子どもたちにとって、新鮮で楽しく、思い出に残るものであったことを願います。

一日目は、まず教会で事前学習してから、東村山市にある国立ハンセン病資料館を訪れました。展示をよく見てメモを取る姿や、映像資料を真剣に観る姿が見られ、各々の仕方でハンセン病の歴史と向き合っているようでした。あいにくの雨でしたが、皆でバスに乗って出かけ

るというのも良い経験になったと思います。教会に戻ってから子どもたちは感想を書き、リーダーたちはハンセン病患者へのイエスの癒し（マルコ1:40-45）を題材とするスタンツ（即興劇のようなもの）に挑戦しました。私たちの心身に潜む闇や病を癒すイエスの救いへの希望について、何か感じてくれたでしょうか。

夕食には、わいわいランチのシェフの皆さまが作ってくださったおいしいごはんを頂きました。多くの子どもがおかわりして、皆で感謝しながら味わいました。夕食の後には花火を行いました。雨も上がり、皆で存分に楽しむことができました。花火を楽しむ子どもたちのきらきらし

た笑顔が印象的でした。お風呂を終えて、聖堂にてろうそくを灯し、祈りの時間を持ちました。一度心を落ち着かせて一日を振り返り、キャンプのために尽力してくださった方々や友達、そして神さまに感謝を伝えました。



翌朝、起床時間が少し早かったために心配していまし

たが、皆元気に起床し、準備していて安心しました。興奮してあまり眠れなかった子どもいたようですが、我々リーダーよりよっぽど元気で、子どもたちの溢れるパワーを感じました。

元気にラジオ体操を行い、朝食を摂って、皆で共同祈願を考えました。キャンプにおける学びや感謝を祈りの言葉に込めて、ミサで祈願することができました。

ミサ後、全員で感想を書いた寄せ書きを持って集合写真を撮影し、祈りをもって無事キャンプを終えました。寄せ書きには、子どもたちが楽しかったことを絵とともにたくさん書いてくれました。その姿を見て、無事キャンプが開催できたことに深く感謝しました。久しぶりの宿泊キ

ャンプで不安もありましたが、清瀬教会の皆さまのご協力とお祈りによって、子どもたちに楽しんでもらうことができました。協力してくださった保護者の皆さま、清瀬教会のシェフの皆さま、信徒の皆さま、そして見守ってくださった神さまに心から感謝いたします。ありがとうございました。

教会学校

墓参



一〇月二六日（日）午後、コロナ感染症の影響で中断していた、清瀬教会としての墓参が六年ぶりに行われました。十四時に教会をマイクロバスで出発し、現地合流の方々を含めて約三〇名が参

加しました。あいにくの雨でしたが、墓前では賛美と祈りのひと時を持ち、久しぶりに共に集える恵みを覚える時間となりました。

墓地係



北多摩宣教協力体企画

ミサにより豊かに与るために

十一月二日（日）午後

小平教会主任デイン神父様

と清瀬・秋津教会主任の野口神父様による、二時間にわたるとても内容の濃い講話でした。会場の秋津教会は約一三〇名と、想定より大勢の方が参加されました。

前半はデイン神父様の講話で、Ⅰ. 典礼憲章 第二章「感謝の祭儀に聖なる秘儀」からミサと超越しの神秘、ミサへの行動的参加、Ⅱ. ローマ・ミサ典礼書の総則第一章「感謝の祭儀の重要性和尊厳」、「言葉の典礼」、「朗読奉仕」の資料を参考にお話が進みました。



「自分たちの信仰の糧」 自分が少年の時に、侍者はミサ応えをラテン語で行っていました。神父は信者に背を向けてミサを行っていました

が、その後第二バチカン公会議後、今の形式になりました。「典礼憲章」（について解説があり）ミサに与ることで神様の慈しみを受ける、許しを受けることができます。

「ミサへの行動的参加の説明」では、神秘の理解、意識的に敬虔にすることが大切です。

第二バチカン公会議の刷新で、みんなが一緒にミサをささげることになりました。

「ことばの典礼」どのようにミサが構成されているか、総則で決められています。イエス様が自ら制定しました。ミ

サは私たちの信仰生活の糧（中心）、神様と結ばれることが大切です。

「信者の出席と行動的参加」 体も心も清く参加することが大切、私たちは典礼委員会、オルガン、朗読者、侍者それぞれが、十分に準備をしなければなりません。

ミサに奉仕する司祭は義務を忘れてはいけません。イエス様はミサの中にいらつしやることを意識することが大切です。

「感謝の祭儀」（お話と資料から）主の食卓を囲むという意味で、典礼全体と同様に、感覚的なしるしを通して行われ、それによって、信仰が養われ、強められ、表現されます。教会の配置も重要です。（中略）この総則は、感謝

の祭儀を適切に秩序立て、一般的な原則を述べ、祭儀の各形体を整える規則を提示することを目的としています。

「言葉の典礼」従来は、司祭「主は皆さんとともに」会衆「また司祭とともに」というミサ応えだったが、二〇二二年待降節からは「またあなたと共に」に変更になった。「開祭」心を整えた後は、み言葉を聴く、座る姿勢も大切です。

「聖書朗読」福音書は、マタイ、マルコ、ルカの順に一年ごとに読まれ、今年はC年で主にルカ福音書が読まれました（王であるキリストの祝日でC年は終了、次はマタイ福音書が主に読まれます）。（資料より）正しい聖書解釈の大原則として「部分解釈の

禁止」というものがあり、聖書の一部だけをもってきて論じることができないとされ、福音書の連続性、一体性が大切。

（お話から）連続性、ルカはフアリサイ派や徴税人について書かれている部分があり、主に第一朗読の旧約聖書は福音に基づいて選択されます。

「朗読奉仕」通常、朗読は神学生が行い、専任朗読者と呼ばれます。一般の教会では信者が行いますので、これは専任朗読者とは呼びません。

聖書朗読は「神のことば」を告げる奉仕ですので、朗読が終わった後、会衆を見て「神のみ言葉」という。宣言する意味合いが大切です。



ここで、小平教会から参加の若手メンバーによる、朗読の実地練習があり、はっきり伝える。み言葉を皆に伝えることが、言葉の典礼として大切ですとのお話がありました。

休憩の後、野口神父様にバトンタッチされました。

今回は、信仰生活がより豊かになるようにという目的で開催しました。ミサの流れについて、なぜこ

ういったものが行われているか、憐みと慈しみ、受け身なのか、能動なのかについて考えてみたいと思います。とお話から始まりました。

「ミサでの所作、司祭と会衆のやりとり」司祭がなぜ手を広げるか、十字架を模す、受け入れる、主から頂く恵を全身で受け入れるなど、司祭の所作、動作には意味があつて行つてることです。

「感謝の典礼（ミサの後半部分）」根本的に、日曜日は主日である、信徒として、キリスト教徒としてご聖体をいただくことの重要性を理解することで、主と共に歩む者となっていくきます。私たちは、七つの秘跡のひとつ、聖体の秘跡をいただいています。と

にかくご聖体をいただくことがメイン、大切。ミサは、「言葉の典礼」と「感謝の典礼」の二部に分かれており、言葉の典礼で、主のみ言葉を聴いて、自分の中の信仰と重ね合わせていき、感謝の典礼で最後の晩餐を目に見える形で証しする（記念する）ことになります。



「礼に関して」礼の仕方、敬意と榮譽を示す所作、日本では遜る、謙遜の意味が含まれ

ています。軽く頭を下げる礼と深い礼がある。

祈りの中で、三位一体の神様の名前が出たときは、軽く頭を下げる、会心の祈りの時も軽く頭を下げる、自分自身が罪びとであることを思い起こす所作として大切なことです。

深い礼をするときは、祭壇に向かう時、ご聖体の顕示の時にいきます。日常生活の中でも使い分けているように、こういうことは、気づかないうちに行っています。

「沈黙の時間」主の恵みを自分の中で反芻するときなど。然るべき時には聖なる沈黙を守るべきと言われるています。

「奉献」ご聖体を頂くことが一番重要とされているので奉献の祈りを大切にしなければなりません。

「閉祭」交わる共同体であるために、よりよいものを求めて行きたいと思います。

閉会の祈り デイン神父様「神様の恵みで集いができました。精霊降臨で教会が始まりました、マリア様に感謝して、勉強したことを通して新たに生きていきましょう。

資料があつた上での講話ですので、お話の部分だけで全体を理解していただくことはとても難しいのですが、雰囲気伝わればと思います文字にしました。

編集者

清瀬教会 クラシック・チャリティー・コンサート

一二月二〇日（日）、相曽賢一朗さんのバイオリンと、奥様ヴァレリア・モルゴフスカヤさんのピアノによるコンサートが行われました。十時ミサ後、多くの聴衆が待つ中、コンサートは始まりました。冒頭、相曽さんから、ご両親が清瀬教会の信徒であつたこと、奥様はウクライナのキウゴ出身で、ご家族はアメリカに移住されたもの、お知り合いが今も戦争で大変な状況にあることなどが紹介されました。



曲目はクラ イスラー作曲「愛の喜び」はじめバイオリン曲としてとても有名な、聴衆もハミングできそうな曲ばかり。

最後は聴衆がスタンディングオベーションで演奏に応えました。コンサートの終わりにKFFCの聖歌隊が加わり、相曽さんのバイオリンと大竹仁美さんピアノで2曲演奏、終わりに皆で聖歌を合唱して、コンサートは大盛況のうちに終わりました。



チャリティーは清瀬教会の聖堂建設
営繕のために使われます。

出演者の皆様、コンサートの企画・実行をしてくださった皆様、ありがとうございます。一聴衆

信徒動向（九月〜十二月）

【転出】

フランシスコ・ザビエル
藤澤 了助さん
（さいたま教区所沢教会へ）
マリア 藤澤 貞子さん（さいたま教区所沢教会へ）

【転入】

フランシスコ
趙 洪峻（ちよう ほん
じゅん）さん（六地区へ）
マリア 鄭 喜瑛
（じよん ひよん）さん
（六地区へ）
マリア・マグダレナ
秩父 明子さん（四地区へ）
【帰天】
パウロ
宮沢 清さん（八月）
マリア・レジーナ
田中 初枝さん（十月）
マルティナ
田村 直江さん（十二月）



9月 敬老ミサ 田村神父様と共に



10月バザー 雨でしたが大勢参加しました



11月 七五三 健やかに



編集後記
おかげ様でクリスマス号も発行できました。寄稿、写真の提供をくださった皆さん、ありがとうございました。
FelizNavidad!
Pablo 丸山